

2015年度フレキシ研究会第12回研究例会（大阪）報告

渡辺 卓夫*

Takuo WATANABE*

（一社）日本印刷学会主催のフレキシ研究会第12回研究例会が2015年6月26日（金）に、日本印刷学会西部支部のご協力を得て、大阪にて開催された。

毎年秋に開催され、今まで東京開催であったが、今回初めて大阪での開催となり、会場は株式会社モリサワ様のご協力により、きれいな広い会場を利用させて頂いた。

あいにくの雨模様の中であったが、会場は満員状態で、多くの質問、熱気あふれる議論が展開され、フレキシ印刷という新しい事業、技術への関心の高さを伺うことが出来た。

研究発表会の内容は計4件の講演で、印刷会社様およびメーカー様から最新の市場、技術動向についての興味深い発表があった。

1. 軟包装フレキシ印刷事業の歩みと今後の課題

ナベプロセス（株）フレキシ印刷事業部
次長 八田俊広氏

2002年7月に「グラビアとフレキシの共存」をテーマにサテライト・ヒル工場を竣工、初期の設備導入、水性インキ印刷のトライアル結果とそこで判明した課題について、実経験に基づいた分かりやすい説明がなされた。

近年はフレキシ印刷業界における各種資材（インキ、フィルム）の改良、開発が進み、フレキシ印刷同業者間の連携が進んで急速にフレキシ印刷が発展している。今後は、CMSの確立（プロセス4色+白）により「時間短縮と結果向上とを目指す！」という方向性が示された。

2. 最近のパッケージ印刷の動向

サカタインクス（株）包装事業部
販売推進部部長 広瀬高志氏

実際に市場に出ている様々なパッケージ印刷物が、どのような版式で印刷されているか、印刷方式を特定して、パッケージ印刷の現状が報告された。

まず、わが家の台所から、と題してパッケージ洗剤容器のラベル印刷物6点の印刷方式を解析し、すでに身の回りのパッケージに様々な印刷方式（グラビア、フレキシ、オフセット）が使用されていることが紹介された。

また、日本フレキシ技術協会（FTAJ）による昨年の欧州パッケージ印刷物調査結果が紹介され、ラベルシール、紙器、軟包装の各印刷分野に着目して、印刷物を分類、どのような印刷方式、インキ（溶剤インキ、水性インキ、UVインキ）が使われているか、解析した結果が報告された。

実際の印刷物の観察、解析に基づいた大変分かりやすい説明であった（写真1）。

3. フレキシ製版処理の動向

富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ（株）

パッケージ技術部課長 田中裕二氏

世界のパッケージ印刷の市場動向、各エリア別の印刷方式の特徴が説明された。特に軟包装分野では、欧米ではフレキシ印刷が主流であるのに対して、日本を含むアジアではグラビア印刷が主流であることが説明された。

世界のトレンドとしては、脱溶剤が注目されてきており、その中でも日本が軟包装印刷において水性インキでのフレキシ印刷を牽引している動きが注目される。

薄いフィルム基材への印刷等がフレキシ印刷に適しているなど、グラビア印刷とフレキシ印刷との使い分け、共存の時代に入ってきていることが感じられた。

フレキシ製版システムでは、従来のLAMS方式における溶剤現像、水現像、サーマル現像の処理プロセスとの主な違いを説明、さらに彫刻型DLE方式についても説明がなされた。各製版方式の特徴と課題について、印刷画質、安定性、コスト等の観点から分かりやすく説明された。

将来は、各製版方式の特徴に応じて使い分けされていくとの考えが示された。

* 富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ（株）パッケージ技術部
（〒106-0031 東京都港区西麻布2-26-30 富士フィルム西麻布ビル）

4. 最新フレキシソ印刷機の動向

アルテック（株）印刷・包装営業部部長
星丘純男氏

まず、フレキシソ、グラビア、オフセットの各印刷方式の説明から始まり、フレキシソ印刷機導入の歴史について語られた。

段ボールに貼り付けるプレプリントはビール箱、コンピューター等の箱に美粧性を付与する印刷として需要が増えている。紙おむつのバックシートを水性インキフレキシソ印刷で行う動きが急速に進んでいる。また、オフセット印刷業界から、新規事業としてフレキシソ印刷を水性インキで始める動きが新たな潮流となってきた等、中でもフレキシソCI印刷機の最近の動向についての実経験に基づく話は興味深かった。

シールラベル用の印刷機は、従来樹脂凸版をレタープレスで印刷していた仕事をフレキシソで行うケースが増えてきており、印刷スピードもアップしている。

印刷機は高速印刷でも見当精度良く印刷できることが重要で、最近の印刷機はすでにそのレベルは達成できており、

色はインキ、画質はアニロックス選定などで決まってくるとの考え方が説明された。

最後に、今後の印刷機が進む方向性についての質問に対しては、色合わせのカラーマネジメントの向上、スリッターインライン、インキ交換の段取り効率化などが上げられるとのことで、少量多品種用途では、デジタル印刷を採用する動きに変わっていくという回答であった。



写真1 当日の講演風景より